

かとうゆうすけ

無所属/28歳/浦賀出身

加藤裕介



所属:(一社)Bridge for Fukushima 専従職員

- 1988年 3月8日生 浦上台出身 家族:父母弟1人 浦賀小・中卒
- 2006年 県立横須賀高校(58期)卒業 ソフトテニス部
- 2007年 吉田雄人インターンシップ生
- 2008年 南開大学(中国・天津)へ派遣交換留学
- 2010年 慶應義塾大学法学部政治学科卒
- (株)ワーク・ライフバランス インターンシップ生(NPO法人ETIC. EIP生)
- 2012年 アクセンチュア(株)退社、復興支援のため福島に移住し、復興支援団体 (一社)BridgeforFukushimaの専従職員として勤務。
- 2014年 復興庁福島復興局政策調査官を兼任。
- 2016年 4年半の復興支援を経て、横須賀へ戻ることを決める

090-7710-7281(本人携帯)

<http://katoyusuke.net>

mail@katoyusuke.net



@katoyusukeYK



1

地域で頑張る人が輝く横須賀をつくりま

2

「それ、本当に、必要ですか？」をきちんとチェックしま

3

若者が社会の一員として受け入れられる風土をつくりま

この政策を実現します



福島での経験を、横須賀のまちづくり・教育づくりに活かします。

✓チャレンジをし続ければ、人が育つ。

私は横須賀の生まれ育ちですが、復興を支援するため、東日本大震災の1年後に福島県福島市へと移り住み、NPOの専従職員として4年半にわたり活動してきました。震災後、福島我的生活環境は津波や原発事故の影響により大きく変化しましたが、「自分の故郷なのだから自分で何としてでも復興させる」と、意志をもった一人ひとりの住民が、身の回りの課題解決のため行動する風土が出来ました。私はそうした変化に負けず、諦めず、故郷を取り戻すべく地道に活動を重ねる方々をサポートし続けた経験から、チャレンジを繰り返すことで地域を支える人材が育ち、現状をより良いものへと変える力が生まれると学びました。

✓誰かにお任せではなく「じぶんごと」としてチャレンジできるまちへ。

横須賀をより魅力的にするためには、横須賀に住む一人ひとりが、身の回りの「変えたいこと」に少しずつ取り組んでいけるようにすることが、大切だと思います。そのため、誰かにお任せして他人事とするのではなく、一人ひとりが「じぶんごと」として捉えチャレンジするまちをつくりま。「若い人の意見がまちに反映されるようにしたい」「横須賀で働き、子どもと過ごせる時間を増やしたい」「横須賀へもっと人を呼び込みたい」「介護・医療に困らないまちにしたい」など、まずは何よりも、横須賀に住む一人ひとりの思いからスタートしたいと思います。

横須賀を「何度でもチャレンジできるまち」

「地域で頑張る人が輝けるまち」「じぶんごと化できるまち」へ。

裏面へ

1 地域で頑張る「普通のひと」が輝く横須賀をつくりまします。

✓地域のひとのチャレンジを応援します。

4年半の福島での復興活動で私は、NPO、営利企業、行政機関、学術機関など様々な人とのつながりをつくって、地域の人たちの活動を応援してきました。地域運営協議会への補助などで、横須賀の各地域の特色ある取組みを応援します。

✓高齢社会を「チャンス」と捉え、高齢者の活躍の場をつくりまします。

高齢社会は、「人が長生きできるようになった幸せな社会」だと考えます。働く意欲があり、知識・技術に富んだ高齢の方々が活躍できる就労環境をつくりまします。特に、中学校での部活動の指導・職業訓練指導・高齢化の進む地域の課題解決に、豊富な知識・技術や人脈を貸していただきたいです。仕事を奪い合うのではなく、誰もが能力を活かせる横須賀をつくりまします。

✓多様な働き方を応援し、未来の雇用をつくりまします。

「学生だけど、起業してみよう」「子どもが寝た後在宅で少しだけ働こう」「今いる会社で全く新しいビジネスに挑戦しよう」など、新しい働き方を応援し、将来の横須賀に雇用を生み出す芽を育てまします。



2 「それ、本当に、必要ですか？」をきちんとチェックします。

✓議会のありかたを見直します

議員定数、政務活動費を見直し、削減を目指します。

✓行政の取組みを市民以外の眼も入れて精査します

何にどれだけ予算を優先的につけるのかの精査は、議員の大切な仕事です。しかし、市民以外の客観的な視点からも精査する必要があると思います。例えば、「社会的投資利益率」と呼ばれる、事業の社会的価値を評価する指標を用いて、市外の専門家が客観的に評価する方法があります。

「失われた20年」とも呼ばれる低成長時代を過ごした私たち世代は、もはや「あれもこれも」やる財源が無いことを実感しています。現在28歳の私は、30年後の横須賀でも現役として働き続ける「責任世代」でもあり、30年後の横須賀に住む次世代を育てていく「子育て世代」でもあります。自分たちの払った税金が、将来のためにどう使われるのか。「ふつうの人の感覚」でわかりやすく発信します。

3 若者が社会の一員として受け入れられる風土をつくりまします。

✓地域社会の中で子どもが学ぶ教育をつくりまします

子ども自身が課題を見つけ、解決に向け取り組む過程で学びを得る「地域課題解決型のプロジェクト型学習」を学校の中でも外でも実施します。子どもが、自分の良いところを伸ばし、興味関心をとことん突き詰められる環境を横須賀につくりまします。

友好都市とのつながり、基地のあるまちとしての英語環境も活用します。



✓若者の居場所をつくりまします

ひきこもっている若者、不登校の子ども以外にも、たくさんの若者が社会との接点が無く悩んでいます。市内約60の貸館施設にある約300室の会議室、および小中学校の空き教室などを活用し、NPOや地元企業の手を合わせ、若者が安心して将来への一歩を踏み出すための居場所をつくりまします。

✓子育て世帯が働ける機会をつくりまします

横須賀の有効求人倍率は0.56倍。2人に1人しか横須賀で仕事は見つけれられません。「子育てでも仕事も全力で取り組みたい」という思いは男女とも共通して持っています。「若者の関心が高い仕事を若者と共につくり、男女ともに子育てしながら仕事にも全力で取り組める環境をつくる」べく、チャレンジします。



「自分に合った仕事が見つからない、学校にも家にも相談相手がいない、何から手をつけたらよいかわからない…」若者は社会との接点が少なく、ひとりで思いを抱え込みがちです。しかし私は、若者は「指導される未熟な存在」ではなく「一緒に社会をつくる仲間」だと思います。私は若者が受け入れられる横須賀市を目指し活動します。